

「過ぎ去ろうとしない過去」—歴史を現在にいか 活かすか？ ドイツ編

担当教員 辻 英史 西城戸誠

コース概要

日程 2019年3月3日～15日

場所 ドイツ連邦共和国（ベルリン、ヴィッテンベルク、エアフルト、ヴァイマール、ミュンヘン）

参加人数 13名

コースのねらい

現代のドイツ社会が、19世紀から現代までのドイツの歴史とどのように向き合ってきたのかを学びました。この時期のドイツでは、ナショナリズムの運動や国家統一、戦争や革命、ナチスによる支配と敵対者の迫害と虐殺（ホロコースト）、さらに東西ドイツの分断と再統一といった、激動の事件がありました。そうした過去の出来事がどのように記憶されているのか、歴史的に形成されてきた町並みや建造物を、観光や地域振興にどのように利用しているのか、各地でその実例に触れ、現地の人にインタビューをおこないました。

また、ミュンヘン大学日本語学科の学生たちとミュンヘンの街をまちあるきし、発見した事柄についてポスターを作って報告するワークショップを開催しました。

この問題をより深く理解するためには、日本の状況に関する知識が欠かせません。そのために、まず2018年夏に長崎でフィールドスタディをおこないました。長崎編と今回のドイツ編の両方に参加したメンバーもいます。日本とドイツの違いについても考えました。

内容

訪問したドイツの街は、過去の歴史の痕跡が至るところにありました。FSで訪問した、そのいくつかをパターンに分けて紹介します。

①記念碑（Denkmal）

いわゆるモニュメント。過去の英雄や時代を賛美するだけでなく、犠牲者を追悼するものもある。

（左）1871年のドイツ統一を記念する巨大なキュホイザー記念碑（テューリンゲン州）

（中）ベルリンのホロコースト記念碑—石棺か墓石を思わせる2711基のモニュメントが並んでいます。

（右）ミュンヘンの白バラ記念館—ナチスへの抵抗運動をおこなったミュンヘン大の学生たちが記念されています。



②「記念館・追悼施設」(Gedenkstätte)

遠ざかってしまう過去にアプローチするための手がかりとして、事件の起こった「現場」が保存され、学習の場となっています。



(左) ブーヘンヴァルト強制収容所記念館——ナチ時代の強制収容所のすぐ裏手に、戦後ソ連軍によって連行された大勢のドイツ人が亡くなった場所があります。

(右) 強制収容所の死体焼却炉を製造していた企業トップフ&ゼーネ社の本社ビルが「記憶の場」として保存されています(エアフルト市)。

③日常生活のなかに過去の歴史の痕跡をとどめる。

(左)「躓きの石」——写真のようなプレートを、ナチスによって迫害された人が住んでいた家の前の路面に設置する取り組み。市民運動によって進められています。

(中) クレーマー橋(エアフルト市)——中世から続く、橋の上に建てられた商店街で、アーティストたちが暮らしながら創作活動をしています。保存協会会長のツヴァイクラーさんと 住民で芸術家のひとりゴブシュさんに話を聞きました。

④観る人の感覚に問いかける

(右)「対抗記念碑」——ベルリン・ユダヤ博物館の「落ち葉」。物言わぬ無名の迫害の犠牲者を象徴する金属でできた顔を、訪問者が足で踏むことで彼らに声をあげさせます。



学習を終えて

私は今回のフィールドスタディで歴史教育は重要なものだ痛感した。経済、文化、政治を期限なく持続できる社会、つまり持続可能な社会を築くためには過去を知り、社会を客観的な視点で見ることが不可欠であるからだ。かつて世界全体で起こってしまった戦争は差別、暴力を引き起こし、文化を壊し、経済を破綻させた。同じ過ちを繰り返さないために、ホロコーストや戦争、差別などの悲惨な過去が二度と起きることのないよう一人でも多く人が過去を知るために、過去について自主的に考える数多くの機会が必要である。(1年 森 裕香)

結論として、記念碑からの想起とは、犠牲者への敬意や偲ぶことだけではいけない。加害者を想起することが、歴史上の悲惨な出来事の反省となり、私たちが同じ過ちを繰り返さないよう、そして私たち自身に行動を促す手段となると言えるだろう。日本人として、日本の歴史についてもっと知るべきなのではないかと感じられた。今後の課題はドイツの歴史を学ぶだけでなく、日本人として日本の歴史を理解し、現在の想起の仕方を学ぶことになるだろう。(2年 矢尾優奈)